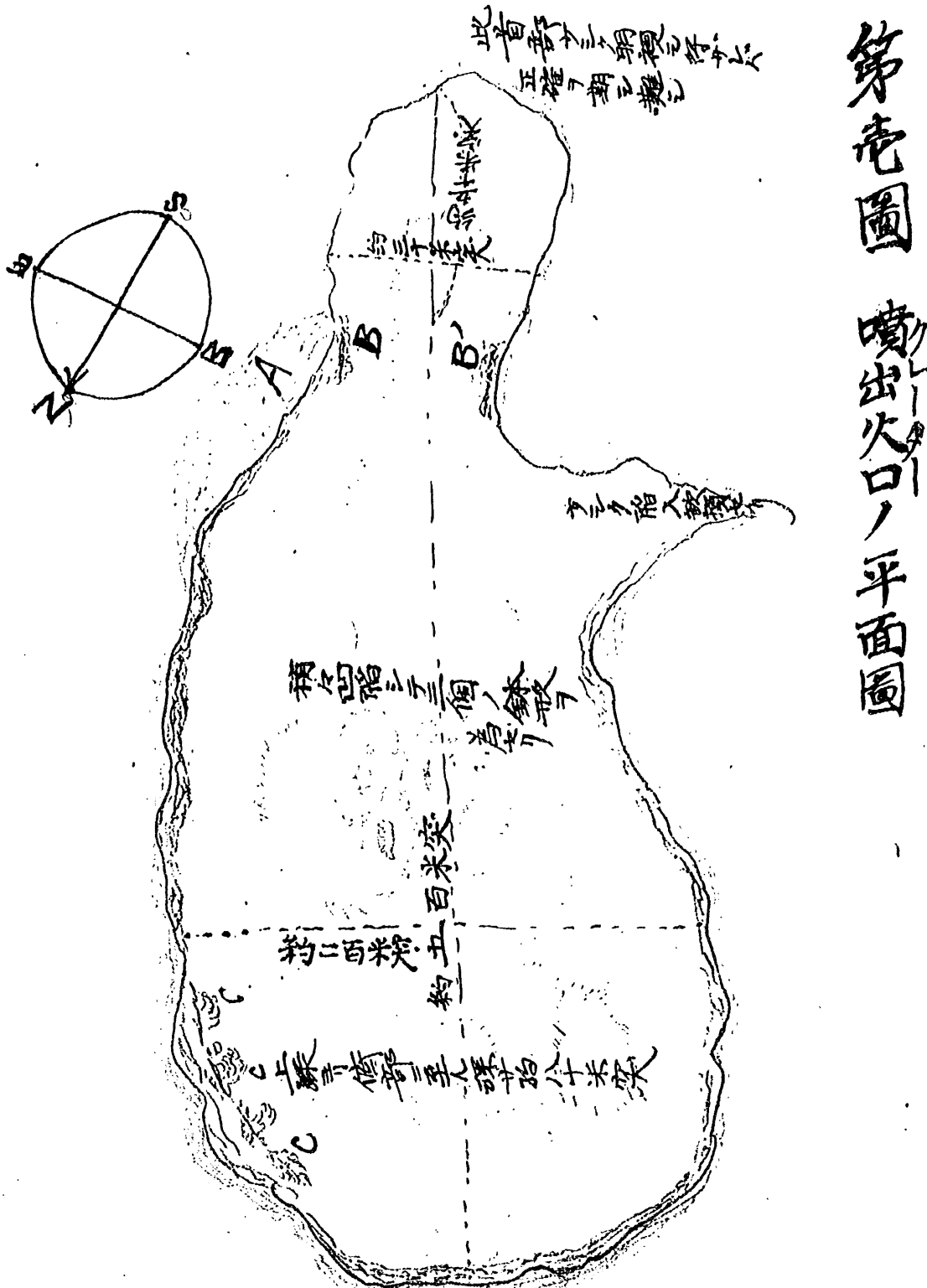


附 第壹圖 噴出火口ノ平面圖



此首部之洞視行六
 正確之期之概
 約三百米
 約二百米
 約一百米
 稱名船三個
 為之錄
 約二百米
 約一百米

附第三圖

大丸南西ノ位置
ニ存取リタル見取圖

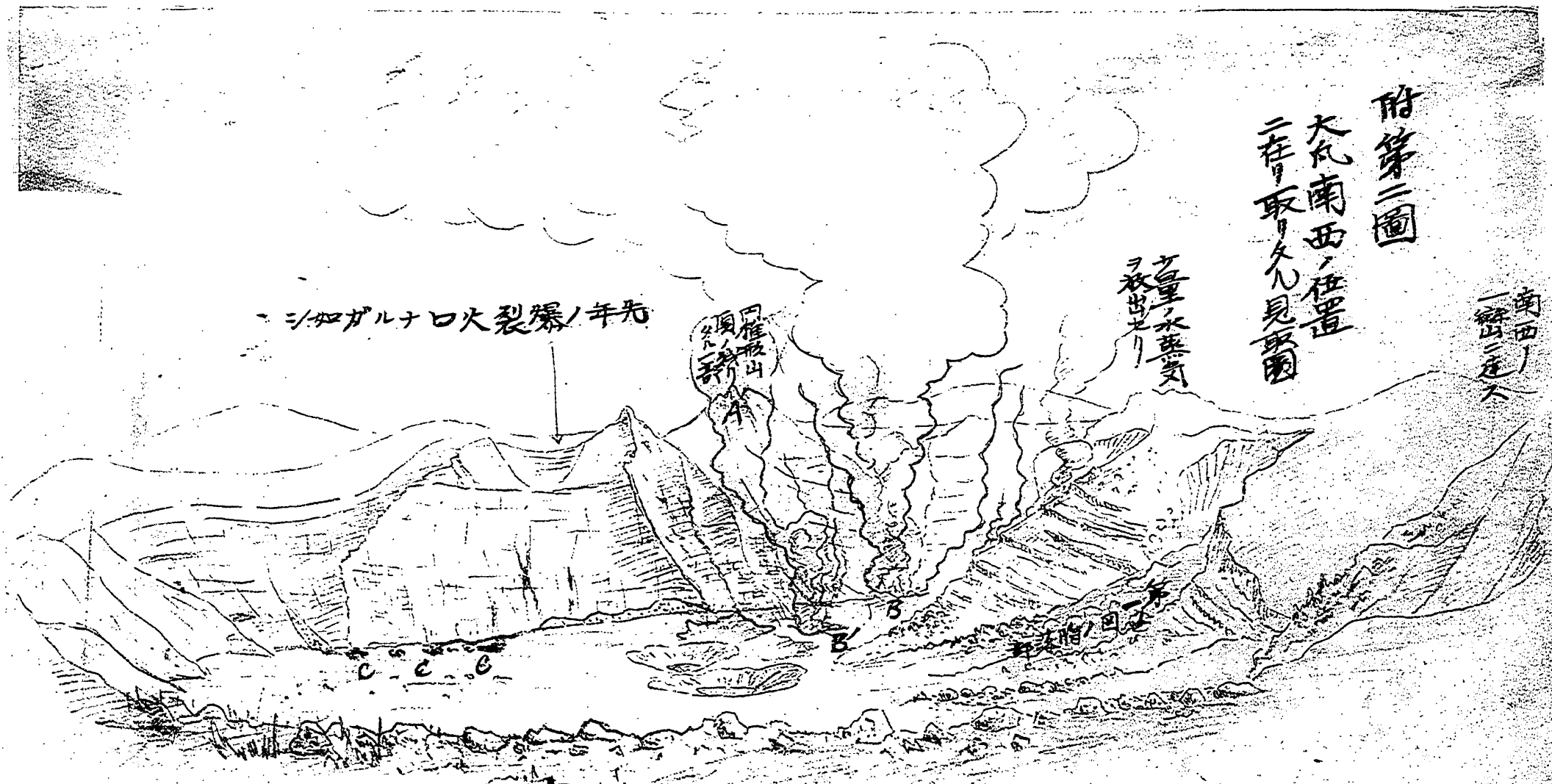
南西ノ
一密ニ在ル

テ量ニ水蒸氣
ヲ放出セリ

先年ノ爆裂火口ナルガ如シ

同標高ノ
山ノ頂
ニ在リ

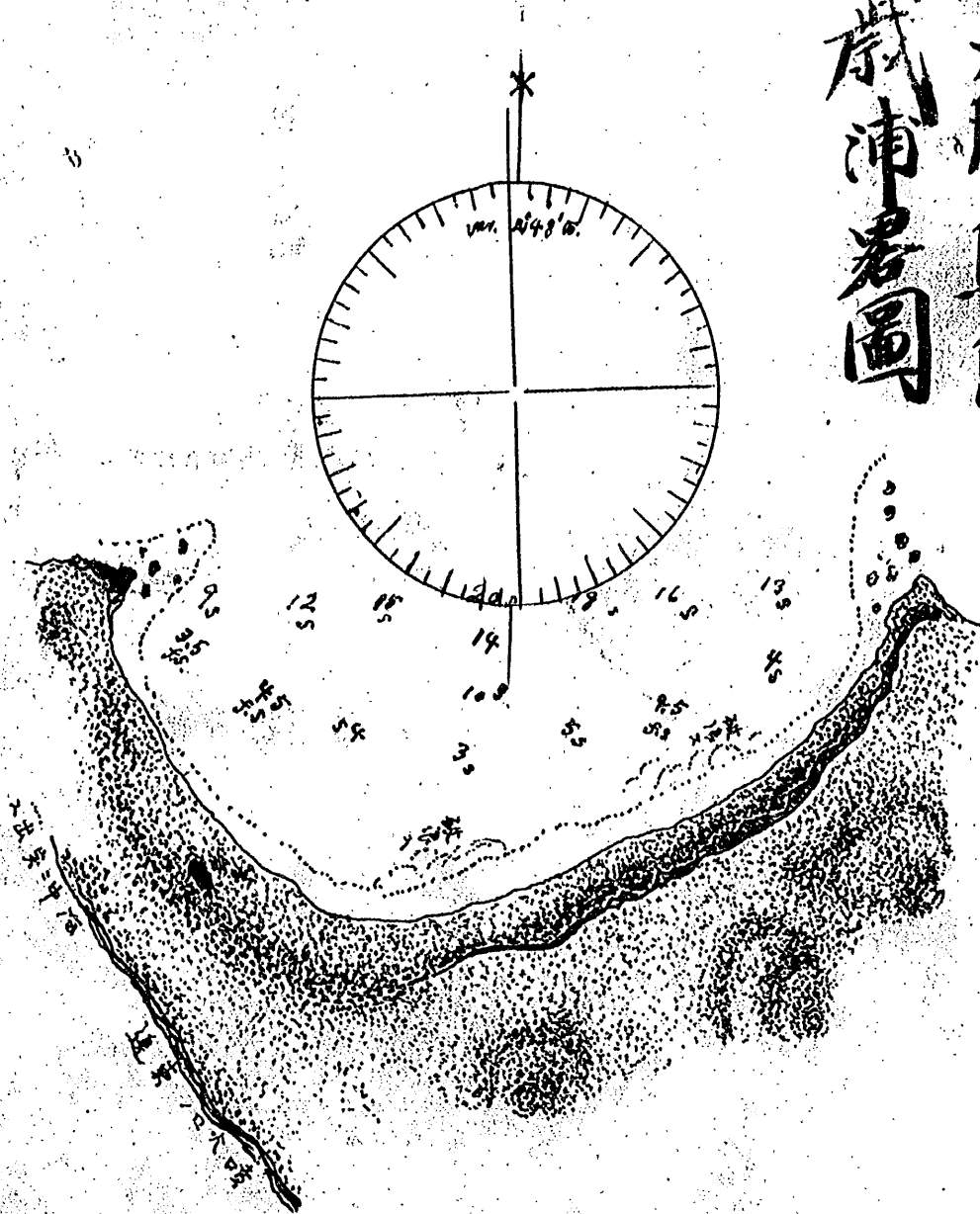
十見取圖
ヲ取リタル
位置



1526

第三圖

噴火后、島 千歳浦岩圖



附第四圖 鳥嶋ヲ北西約二哩ヨリ見先見取圖



1527

供覽

軍務局

醫務局

人事局

軍令部

捷報第三八九号

十月三日進達

進達

別母憲法大軍医依未少軍医提出係八南島場

進達

九月廿七日

第二課長

高千穂艦長 梶川良吉

横須賀鎮守府司令長官 岡野井上良壽 殿

第一局

第二局

第三局

参謀長

副官

九月廿九日進達

横須賀鎮守府

副官

副官

十月二日

横須賀分社印

海軍

1529

軍艦高千穂南多島航行記

軍艦高千穂南島嶼航行記

軍醫長海軍大軍醫 隱岐敬治 郎

乗組 全 少軍醫 佐々木喜右門

軍艦高千穂ハ曩ニ水雷敷設艇八隻ヲ大湊ニ護送スルノ命ヲ領シ之ヲ四隻ヲニ二分シ其第一回護送ノ任務ヲ了シ横須賀ニ歸着シタルハ八月九日ナリキ次ヲ直チニ第二回護送ヲ果スベカリシカ偶々余アリテ任務ヲ變更セシ南島嶼(マーカス)ニ航行スルトナリ八月下旬若クハ九月上旬ヲ以テ横須賀ヲ解纜スルトニ内定セラル而シテ期日マテハ實ニ二十有餘ノ日子ヲ剩スアリ仍テ一般乗員ニ十日間宛々夏期休暇ヲ與ヘラレ半艇相交代シテ休暇スルトナリ超ヘテ今月十日ニ到リ島嶼噴火シ全島人ヲ擧ケテ亡滅ニ歸シタリトノ報アリ是ニ於テ更ニ豫定期日ヲ變シ可成の速ニ出艦談嶋ニ寄港シ其狀況ヲ視察シ然ル後南島嶼ニ向ハントニ定メラル仍テ艦内各部ニ於テ諸般ノ航海準備ニ着手ス我カ衛生部ニ於テモ規定ノ藥品療用品等ヲ臨時請求積載スルトシ八月廿一日迄ノ諸品ヲ横須賀療品庫ヨリ領收セリ

枸橼酸

一三五〇〇

依的兒

四五〇〇

酒石酸

九〇八〇

イヒチオール

八四〇

顯微鏡

一台

及 附屬品色素類

若干

脱脂綿花

二二〇の奴

脱脂綿紗

一六反

中ニ就キ顯微鏡ハ其用途頗ル多大ナリト雖モ持ニ這回ノ航ニ要スル所ハ太平

洋海底ノ所謂「バシピアス」ノ研究、鳥嶋ニ微動植物ノ調査ニアリトス

枸橼酸、酒石酸等ハ熱帶地方航行ニ付キ植物酸ヲ處スル場合アルヘキヲ察

シタリナリ脱脂綿花及ヒ脱脂綿紗ヲ要求シタルハ鳥嶋噴火ノ爲メ被害患

者ノ救護ニ備ヘタルニ外ナラス

糧食ハ士官准士官及ヒ下士卒共ニ凡ソ三週間ヲ見込ミテ搭載シ又嗜好

品及ヒ酒保品トメ新鮮ノ菓■菜類ヲ積ミ込マシメタリ八月廿二日午後五時

艦長以下定員三百四十名便乗者八名總員三百五十名ヲ載セ横須賀ヲ出港ス

是ヨリ前出港ニ先チ著患ニ非サルモ熱帶地方航行ニ堪ヘスト認ル者三名

(貧血患者一、心悸尤進患者一、熱症患者一)ヲ前後二回ニ分チ横須賀海軍病院

ニ送致セリ故ニ在艦員ハ咸チ健康状態ニアリシナリ

第一航泊及湊程

航泊 明治廿五年八月廿二日午後五時横須賀軍港ヲ抜錨シ針路ヲ鳥嶋ニ取リ

廿三日午前九時五十分八丈嶋沖ニ着シ針路不正該地ニ於ケル錨所洞輪輪澤及ヒ

藍ノ江ノ視察ヲ遂ケ今日午後二時青ヶ嶋沖ニ漂泊約三十分ニ進航ヲ始メ午

後五時「ビヨネー」区列岩ヲ南微東二分一東ニ視廿四日午前九時五十五分鳥嶋沖

ニ漂泊即時探検隊ヲ上陸セシメテ人畜ノ隻影ヲ止メサルヲ確カム午後五時三十五

分総員分隊莫檢位置ニ救急列シ罹災者ノ爲メニ特ニ吊悼式ヲ執行シ五時四十分

分針路ヲ南六十八度東ニ定メ南鳥嶋ニ向ヒ廿八日午前十一時十七分南鳥嶋沖

ニ停止漂泊廿九日午後一時三十五分抜錨小笠原群島ニ向ヒ九月一日午前一時

廿四分小笠原父島ニ投錨全三日午前九時七分出艦四日午前五時十分鳥嶋

ヲ北々東二分一東ニ認メ全十時四十分「ス」島ヲ左舷艦首約二隻ニ視午後

五時五十分青ヶ嶋ヲ左舷正横約九哩ニ視過シ五日午前九時四十六分横須賀

ニ投錨ス

里程 自横須賀至八丈嶋 百三十五哩 自八丈嶋至青ヶ嶋 三十三哩

自青ヶ嶋至鳥嶋 百四十哩 自鳥嶋至南鳥嶋 八百哩

自南鳥嶋至小笠原父島 六百六十哩 自父島至横須賀 五百四十哩

合計二千三百〇七哩

コノ行日ヲ費ス丁十五哩ヲ算フル丁實ニ二千三百〇七ニ達セリ其間、航過セシ各島ニ関シテ一々單簡ナル記載ヲ施シ以テ本報告ヲナスノ責ヲ塞カントス中ニ就テ本艦ノ寄泊シテ吾等ノ實踏ヲナセシモノアリ又單ニ書籍地圖ニヨルモノアリ甲ニ(實踏若クハ實見)乙ニ(参照)ト記註ス焉レヲ諒セラレントヲ望ム

第二各島地理狀況

一 八丈嶋(参照)

本島ハ伊豆七嶋中最モ大ナルモノニシテ北緯三十四度四十七分五秒ニ位シ地勢東北ヨリ西南ニ向テ蜿蜒シ東西ニ里半南北四里周圍十里十三丁十八間全島ヲ分テ大賀郷三根末吉中郷檉立、五ヶ村及ヒ小島青ヶ嶋ノ屬嶋トス地質 全島火山噴出ノ燒砂ヨリ組成セラル、モニシテ末吉中郷檉立、三村ハ既ニ土化シ稍、肥沃ナルヲ以テ植物ノ生育良好ナルモ大賀郷三根、二村ハ噴出セル燒石堆積シ未ダ分解ニ至ラサルヲ以テ地磽瘠ニシテ植物ニ適セス降雨ニ會スルモ水分忽チ地底ニ滲入シテ瀦溜スルナシ

島嶼ノ二

氣候 冬月尚ホ温和ニシテ華氏六十度ヲ昇降スルニ過キサル故ニ内地ニ於テ

極寒期ト雖モ絮衣ヲ着スル人ナシ唯末吉、中ノ郷、檉立ノ三村ハ寒クシテ往々

氷結ヲ見ルト云フ夏日ハ炎熱劇シク堪ヘザルコトアリ本島ハ春夏秋冬ノ三季アル

ノミ故ニ本州ノ嚴寒ノ頃モ猶ホ茄子蕃椒等繁茂成熟シテ其莖ニ三年ヲ

経ルモ枯死スルコトナシ然レモ天候陰暗多ク屢々降雨シ又暴風多クシテ海上波

濤高ク八九丈ニ及ヒ飛沫迸散シテ田園ヲ害スルコト甚カラス常ニ島民ノ患ヲナ

スト云フ

村落 大賀村ハ海陸ノ便アリ其繁盛島中ノ主位ヲ占メ土地廣潤ニシテ田園

多ク南ハ海ニ瀕シ八重根灣ヲ擁シ北ハ三根村ト相接シ地勢平坦ニシテ水利ノ

便アリ

三根村ハ地勢平夷ニシテ水利アリ北ニ小灣アリテ船ヲ寄スルニ便ナリ東ニ三原山西

ニ西山アリ

末吉村ハ西南北ノ三面ハ峰巒重疊人家其間ニ点在シ東方僅カニ海ニ瀕ス

ト海崖嶮峻ニシテ船ヲ寄スベカラス島中第一ノ僻境ト稱ス

中ノ郷村ハ檉立、末吉、ニ村ニ介在セルヲ以テ此名アリ東ハ海ニ面シ南ハ檉立ニ接

シ西北ニ三原山アリテ土地高燥ナレモ水利宜シク水田多クノ地味稍肥沃ナリ
檜立村ハ西北ニ三原山ヲ負ヒ東南南海ニ面シ海岸險絶ニシテ澳場ナシ

属島小嶋ハ一名宇津木島ト云ヒ八丈嶋八重灣ヨリ西方一哩餘ニ位シ東

西十六丁南北九丁余周圍僅カニ三里三十丁二十六間ニ過キス四周峰巒巍我

トシテ聳フ土民嶮岨ノ地ヲ夷ケテ茅屋ヲ結ヒ又ハ陸田トナセリ全島ノ人家互ニ

断續深溪ヲ以テ相距ツ故ニ彼我交通スルモノ數百尺ノ懸崖ニ檜橋ヲ架シテ

往來ス中央最高ノ絶壁ハ直立一千八百二十六尺餘ナリト云フ全島ノ地質ハ岩

石ニシテ水田ナク嶮山ヲ開墾シ僅ニ畑トナセシモ土地傾斜シ風強ク日干害多ク

收穫稀少ナリト云フ

八丈島ノ男子ハ専ラ漁業ニ従事シ女子ハ機業ヲ營ミ檜立ノ一村ハ澳場ナキヲ以テ

農桑ヲ勤ム澳船四十七隻アリ小島ハ其耕地皆山腹嶮阻ノ処ニアリテ至難

ナルカ故ニ漁業ニ従事セリ春夏ノ交鰹魚ヲ澳スルノ平年二三万円ニ下ラスト

云フ澳船十隻ヲ有ス

八丈嶋全島ノ戸數人口及地反別(明治三十年十二月調査)

戸數 一千六百十三戸 田反別 四十八町一反零二十步

人口 九千九百七十四人 畑反別 四百零三町二畝十三步

二青ヶ嶋(實見)

本島北緯三十二度三十八分三秒東經百三十九度四十三分四十九秒ニ位置ヲ占ム
丈嶋ニ屬シ往古鬼ヶ嶋ト稱セルモノニシテ源爲朝之ヲ葦島ト改メ後世青ヶ
嶋ト改稱セリ七島中最極南ニ在リ東西二十丁南北十二丁餘周圍三里山岳
四周最高千呎ニ達シ中ニ大壑アリ海岸ハ概シテ峻岩絶壁上陸ノ便ヲ欠
クテ以テ懸崖ニ木材ヲ架シ槓木ヲ結ビ付ケテ梯トナシ之レヨリ昇降セリ
但シ水池浦、神子浦、西浦、三浦ハ纔カニ小灣ヲナシ海陸ノ交通ヲナスニ足
ルベシ

地質 全嶋噴火ノ燒石ヲ以テ組成スト虽ニ表層稍々次土ニ化シ植物生育
セリ安永明和中噴火シテ一旦焦土ニ歸シ近年又池ノ澤ト稱セル所ニ噴火セリト
云フ

氣候 ハ丈嶋ニ比スレハ暄暖ニシテ土民終生霜雪ヲ知ラス夏日ハ炎熱堪へ
ク年中風強ク特ニ雨後ノ大風ノ如キニ至テハ山壑爲ノニ崩潰シ
岩石轉落シテ其響雷ノ如シ居民敢テ山下岩峰ノ側ニ接近セズト云フ

秋夏ノ交海上平穩ノ自船ヲ返ベテ鯉魚ヲ釣ル又大蝦ヲ澳ス澳船三十隻
船頭ノ言ニ依レハ現住民五百有余アリト云フ

這回鳥嶋ノ噴火ニ就テハ本島ハ何等ノ影響音ヲモ感受セザリシト云フ

三 鳥嶋(實蹟)

位置 北緯 三十度三十分 東經 百四十度 東分 太平洋中ニ屹立スル

孤島ニシテ富士火山系ニ屬スト云フ横須賀ヲ距ル丁三百十二哩八丈嶋ヲ距ル丁

百六十七哩アリ

事變前ニ於ケル住居家屋棟数十七戸戸数四十人口百三十五人ニ内譯左如シ

總數

男

女

八丈嶋人

八三

四八

三五

小嶋人

一五

七

八

小笠原嶋人

一〇

七

三

大嶋人

八

五

三

東京其他地方人

九

六

三

之レニ最近ノ移住者二十八人ヲ加フレハ合計百五十三人トナルナリ

面積 周圍ニ里三町三十三間、面積百三萬九千四百五十五坪アリ内

六万七千二百九十坪ハ海岸地ニシテ餘面積内譯尤ノ如シ

畑 七六六〇二坪 原野 二〇一九八五坪

宅地 二、一三〇坪 墓地 三、六五〇坪

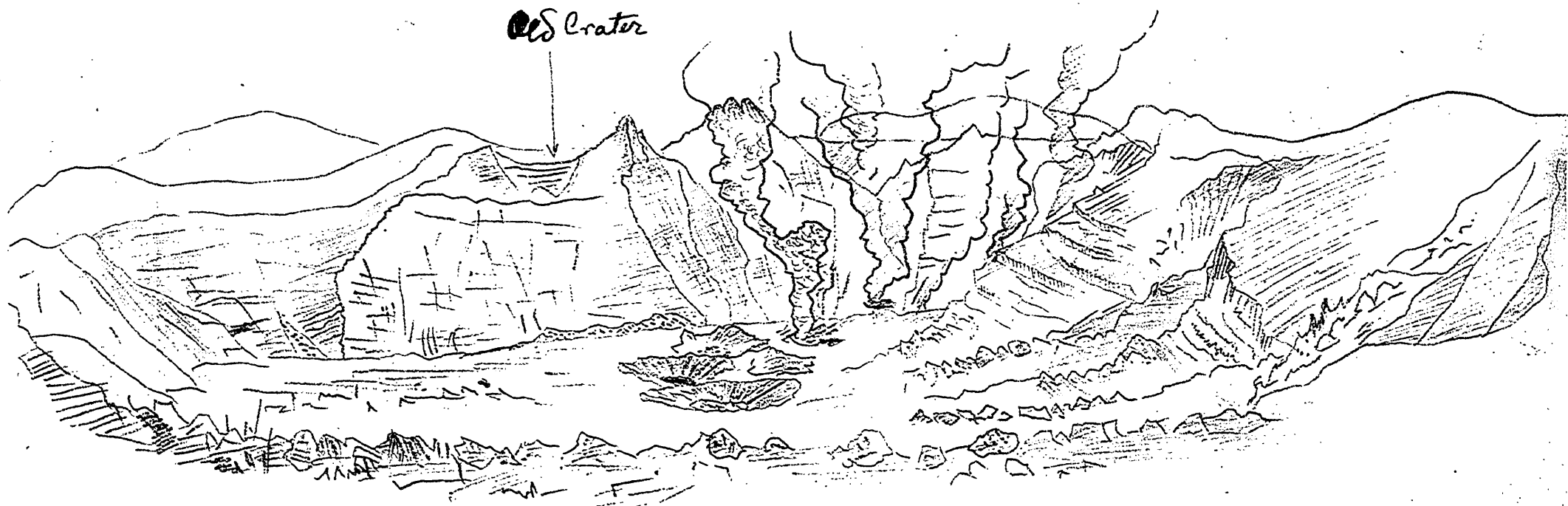
造林 五、八六〇坪 岩石地 一、一七、五六〇坪

牧場 一八三、〇七五坪 砂地 九、五〇〇坪

秣山 七三四、五〇一坪 道敷 一、五、八五〇坪

八月廿四日本島ニ着スル二時間以前ノ海上ヨリ本島ヲ望ミツノ猶ホ白焰ノ上ヲ見ル既ニ着スルヤ恰カモ内務省ヨリ命ヲ啣テ同島調査ノ爲メ派遣セラレタル同省官吏ノ一行及ヒ大學ヨリ専門ノ士ノ搭シ来レル兵庫丸ノ數時間以前ニ到着シタリアリ全十時二十分「カッター」一自鷹一ヲ懸シテ上陸探査ス上陸ハ島北岸ナル午歳灣ヨリセシカ此灣ハ固ト頗ル灣入セシトノコトアルモ今ヤ噴灰ノ爲メ大半ヲ埋没セラレ鏡カニテノ形迹ヲ存スルノミ之ヨリ山脚ヲ攀ツルニ噴灰堆カク脚ヲ固定スルニ大ニ困難ヲ覺フ灰中処々ニ噴飛セラレタル岩石熔岩ヲ交ヘ岩灰ニ点々硫黄ヲ沈澱シ爲メニ硫黄臭ヲ放テ大ニ点

スレハ燃燒スルモアリ漸ク上リヤ、西スレハ一大陥没アリテ海水深ク灣入シ其
 窮マル所温泉ノ滾々トシテ湧出スルヲ見ル這ハ從前漂流澤ト稱ヘ漂流
 人ノ浦ノテ漂着セシ所ナリト云フ是ヨリ谿ヲ度リテ前面ノ山ニ至ラントスルニ屍
 臭甚ク鼻ヲ衝ク仍テ若干尺ヲ試掘スルモ發見スル所ナシ更ニ山又谿ヲ
 越テアルニ処々ニ屍臭ヲ認ム而カモ終ニ一枝ヲ見ス漸ク上リテ山ノ顛ノ噴火
 坑ニ達ス(別圖參觀)坑ハ楕圓形ニシテ南北ニ長シ周圍十町余アリ坑中更
 ニ五小坑ヲ存シ之ヨリ水蒸氣ヲ噴出ス蒸氣中頗ル硫化水素ヲ含ムモノ
 如シ坑圍ヲ一周シテ西南ヲ實踏シテ西北ニ下ルニ此處ニ一帯ノ細小草木ノ
 蕃茂シ中ニ若干ノ田畝アリテ蔬菜之實ルヲ見ル蓋シ此邊ハ全ク燼灰ヲ
 被ラリシヲ知ルニ足ルヘシ若シ人畜ニテ難ク此ニ避ケン乎危クモ生存セシナシ
 而カモ其片影ヲ遺サレラ見レハ恐クハ夜間熟眠中猝カニ破裂ヲ呈シ
 人畜ヲシテ逃竄スルニ暇ナカラシメタルモト想像シテ可ナルニ似タリ或ハ晝間
 ニ起リシ事變ナハ二百有余ノ中一二、此ニ畝作若クハ採鳥セシモアリシナラシ
 聞ク住民ハ採鳥ノ傍ヲ牧畜ヲ營ミ牛ノシニテモ二十有余頭アリシト而シテ
 今ヲ斷肢ダモ之ナシ天ノ災ヲ下ス復ク慘ナル哉



Looking Southward
Explosion of 鳥島 Volcano

1540

地理

鳥嶋ハ地球學上ニテ曰ハ富士火山帯ノ一ト見做スヘシ即チ富士ヲ東南ニテ箱根アリ伊豆ノ諸山アリ更ニ南シテ伊豆七島アリ小笠原嶋アリ八丈嶋アリ以テ本嶋ニ及フ火系上這般ノ災禍ヲ來スハ蓋シ偶然ニアラサルナリ

噴火學說 噴火ノ學術的研究ハ吾等ノ職トスル所ニ非サルハ之ヲ記述スルノ識ナク又ツノ要ナキカ如シ然レモ生理學者タルハックスレーハ英國海軍ノ軍醫曾奉職中地質及ヒ動物ノ研究ニ身ヲ委子タリシナリ生物學者タルダールウインハ土壤潮流ノ調査ニ半生ヲ腦ヲ糜シタリシナリ哲學者タル

スペインサーハ海底ノ沈澱ニ着目シ老餘化學試驗ヲ親ラシタリシナリ科學ノ及フ所ツノ關係極メテ汎ケレハ也吾等豈ニ恒ニ耿々トシテ箇般ノ概念ナクシテ可ナシヤ爾邊ハ自ラ怩怩冷汗ノ流ルヲ覺見ヘサルナリ

噴火ノ通因ヲ論スルニ先テ地球ノ成立ニ言到セサル可ラス蓋シ太古ハ地球全部非常ノ高熱ノ爲メニ熔融セラレリシナリ爾後其表面冷厥スルト共ニ多少堅實ナル地殼ヲ形成セシモノノ凸凹不平ハ免カレシテ或ハ谷トナリ山トナリ海ト

ナル而シテ地球内部ハ依然トシテ者沸熔融シツアリテ地殼ヲ浸潤滲透スル水分ハ此熱ニ逢テ速ニ水蒸氣トナリ逶出セトス此際ニ方リ具ノ最モ

ナル而シテ地球内部ハ依然トシテ者沸熔融シツアリテ地殼ヲ浸潤滲透スル水分ハ此熱ニ逢テ速ニ水蒸氣トナリ逶出セトス此際ニ方リ具ノ最モ

抵抗少キ部分ヲ撰ムテ破裂噴出スルハ理ノ最モ見易キ所^{トス}乃々多少^ト較
 裂^レ部^ニ換言スレハ日^ノ噴火セシ迹^ト(所謂ル^ル痕^ト)アリシ所ノ如キハソノ犠牲ト
 ナルヲ免カレス鳥嶋ハソノ骨^ヲ火^ニ山^トリシ故ヲ以テ此^ニ矣^ト於テハ頗^ル破裂ス
 ハキ資格アリシヤリ破裂ニ二種アリ一ヲ爆^發(Explosion)ト去ヒ一ヲ破^壞
 (Collapse)ト去フ畢竟破裂ノ狀況ヨリ命名シタル稱呼ニ過キス鳥嶋ハコノ
 二者ヲ兼有セリトハ神保小虎氏ノ揚言セル所ナリ噴火ニツキ且取モ注意スル
 キ産物ハ熔岩ナリ鳥嶋ノ例ニ於テハ熔岩ノ狀ヲナセルヲ殆^トシト云クシテ率
 于灰化シタリシヲ見ル

地震ト噴火トノ密着ノ關係アルトハ専門學者ニ非サルモ人ノ克ク識ル所ナ
 ル力^ノカ説明ヲ聞クニ尤^ク如シ即チ破裂ノ爲^ニ其震動ヲ波及シテ地層ヲ
 震ハシムルモノ一又破裂ニヨリテ起ル地層ノ欠陥ヲ補ハシカ爲^メニ地層^ノ他部
 ニ變動ヲ來シ因テ以テ起スモノ一又噴火山ニ於テ特ニ破裂ヲササ^ルルモ噴火山
 ノ近傍ハ地層ノ異動多キカ爲^メニ起リ得ヘキトナリ

過去ノ鳥嶋(志賀重昂氏講話概要)

鳥嶋ハセントピートル又ハセントビエール(先般火山大爆裂ノ爲メ非常ノ慘害ヲ被

リタル西印度ノ地名ト偶々同一ナルモ奇縁ナリトテ西洋ノ捕鯨船帆前船ナドニ久
 シク知ラレタル火山島ニシテ日本人ハ百餘年前此ニ漂着セル歴史アリ然レモ同
 島ヲ拓殖シ利源ヲ開發シタルハ實ニ八丈嶋ノ玉置半右衛門ヲ以テ嚆矢トス玉置
 ハ今ヲ距ル四十一年前即チ文久二年徳川幕府カ小笠原嶋開拓ニ着手セル際
 移住ヲ志願シ同島ノ草分ヲナシタル人ニシテ明治二十年ノ秋東京府御用船明治丸
 硫黄島採檢ノ際全志十人ト共ニ同船ニ便乗シテ鳥嶋ニ上陸シ其際明治丸乘
 組員ニ鳥嶋ニシテ水無ケレハ住居スベカラザルヲ以テ硫黄嶋ヨリ歸途ニ必ス鳥
 嶋ニ立寄ルヘキヲ固約セシニ拘ハス明治丸ハ歸途風濤ノ高キ故ヲ以テ遂ニソ
 ノ安否ヲ確メスレテ歸航セリ是ニ於テ志賀氏新聞紙ニ寄書シ早速救助
 船ヲ派出スヘキヲ切論セシヨリ鳥嶋置去人事件ナルヲ當時ノ初論トナリ東京府
 ハ救助船ヲ野丸ヲ派遣スルコトナリ志賀氏モ便乗鳥嶋ニ渡航シタリ當時
 同嶋ハ三個ノ峯巒駢列シ同嶋カ舟人ノ間ニ早クヨリ三子島ト称セシテ偶然
 ナラザルヲ知リシト云フ諸又鳥嶋ニ置去ラレタル人々ハ必死トナリテ島内全体ヲ分チ
 飲水ヲ索ノレモ一掬ノ泉ダニ無キヨリ海岸ニ井戸ヲ鑿金タレト鉄鍋ノ破片ヲ以
 チ釜地ヲ掘リシニ岩眼ヨリ水迸リ出テシヲ以テシヤト皆驚喜腰ヲ抜カサレ許

リナリ然ルニ右、温泉ナリシヨリ之ヲ冷シテ飲料ニ供セリト尚又地下ノ深キ處ヨリ
鳥骨モ出テシ故近代期ニ此島ノ爆裂セシマリシハ以エノニ事實ニ依リテ知ラル
ベシ却説玉置氏ハ嶋ノ鳥モヲ外國ニ輸出シ年利凡ノ二万餘円ヲ得赤手ヨリ
起リテ巨萬ノ富ヲ累ヌルニ至リタリト

四 南鳥嶋 (寶踏)

歴史、木嶋遠ノ末國宣教師發見ニ係リマカス島ト稱セラル者時人跡
絶ニナカリシカ南東捕鯨船ノニ四回來着セシ一ハ北太平洋水路誌ノ所載
ナルモ記事完カラス邦人トシテ高知ノ人信崎常太郎ナルモノ明治十六年
十月樺濱ヨシロ一會社英船エター号ニ乘リ上陸セルヲ以テ予トストク降テ
今廿九年十月東京會社南洋部長水石新六南洋貿易ヲ為メ帆船
天休丸ヲ艇ニ樺濱ヨシロ航途ニ入島ニ寄リ港ヲ新水ヲ得全土ヨリ出帆十二
月三日小笠原母嶋ヲ臨ル東々南大約六百五十哩一無人島ヲ發見セシ是
レ南鳥嶋ナリ故木嶋ヲ以テ水石氏ノ發見ニ係ルトナセリ其後後備海軍
大尉小林春シト相前後シテ木嶋ニ到リ小笠原諸島ノ旁働者ヲ移住セシメ
木嶋特産會内屬ノ羽毛賣ニ類ヲ採取輸出セルヲ漸ク世人ノ耳目ヲ惹ク

諸島四號ノ二

俄領分電印刷

宣り竟二十一年七月東京府告示ヲ以テ府下小笠原嶼所屬トせん是ヲ先明
 治二十一年末船長ロービルル者本嶼より其水陸産ノ充實ニ着過スハカ
 カルヲ視察未後之ヲ台領ヲ政府ニ乞ヒシモ許サズ遷延今日に至リシカ
 今政府ノ認許ヲ得之ヲ台領ノ為メ本年七月十日布哇ラハ帆ヲ報本邦
 ニ達スルヤ我政府ニ黙視スルコト能ハス乃今月廿日軍船笠置ヲ派遣シ
 石井外務書記官ヲ振セシメ同人ヲ諭シテ本嶼ヲ退去セシムルコトナリシカ未船
 未カ着セシテ笠置ノ兵員若干ヲ買メ置キ降帆執リテノ翌日ヲ以テ該船本
 島より仍テ駐在中尉トシテ論シ且石井書記官ノ書状ヲ以テ之ニ答答シ
 之ニ應シ奉ナラシ退去セリ即チ正當ニ我力主權ヲ認メノ事ナリキ
 位置 本嶼ノ西端笠置岬東經百五十四度分北緯三十四度十七分テ小笠
 原群島ヨリ東微南約六百四十哩極須賀ノ東南東一千里ナリ
 形勢 全形ハ二二三等ノ形ヲナシ兩岸黒井岬ヨリ笠置岬ニ至ルニ
 東岸黒井岬ヨリ坂本岬ニ至ルニ五鍵南岸即チ坂本岬ヨリ笠置岬ニ至ルニ
 八鍵ナリ地質珊瑚礁ヨリ成リ表層ニ腐朽セル落葉鳥糞自砂混シシ黒
 土様化シ菓草木繁茂シ東西北ノ三岸ハ出礁圍繞シ南岸一帯ハ

ハ白色ノ礁礫^推積^{シテ}暗礁ノ間ヲ縫^テ僅カニ小舟ヲ寄^ル得海面ヲ援^ク

「二十ニ天ヲ以テ最高所トナス

〔降雨〕島民ノ談話ニ依レハ雨量甚タ少ク一ニテ月中降雨ナキト稀ナラス時驟

雨ノ來龍^{アルモ}短時ニシテ去ルヲ常トス然ルニ笠置上陸員滯島三十三日間ハ驟雨

屢々來リ殊^テ雨量多ク用水ニ不足ヲ告^ゲザリシト去^リ風雨ハ至^リシテ南風ナリ

〔飲料水〕島内ニ數ヶ所ヲ穿^チアルモ水質皆帶色濁濁シ鹹味ヲ帶^ヒ殆^トシ海

水ノ如ク^下スヘカラス故ニ島民ハ雨水ヲ以テ飲料ニ供^ス故ニ降雨ナキトキハ不完全^ナ

ル蒸餾器^{燒酒製造用ノ器}ヲ以テ村民ニ十九名ノ需用ニ充^ツ其不便^甚カラズ

置^上陸員ハ滯島中二日間蒸餾器ヲ便用^セシ^ト是^レ當時ハ濕潤期ニ

雨量多カリシ由ル

〔獸類〕獸類ハ一モ棲息セス

〔鳥類〕鳥類ハ本島ノ財源ニシテ其數極^メテ多ク全島皆鳥ト稱^スルモ敢^テ過言^{ニア}

ラス故ニ年捕容易ナリ其種類ニ從^ヒ區別^スレハ約二千種アリ其名稱ハ小笠原島

民ノ余名セル所ニシテ主ナルモノ如シ

一 信天翁^{俗名馬鹿鳥} 嶋中最大ノ鳥ニシテ白黒ノ二種アリ産卵ノ為^メ十一月來^リ四月去

ルト其味ノ美ナル蓋シ本嶋諸鳥ニ冠ク

ニ燕大サ鳩ニ比スヘク八月至リ一二月頃来ル其味佳ナリ

三袋鳥軍船鳥天狗或ハ海脚ト云フ信天翁ト共ニ嶋中大鳥ニシテ兩翼ヲ張ルトキ一尋余翼ヲ收ルモ三四尺ヲ下ラス類頸部ニ囊ヲ具シ時々之ヲ膨脹セシム四季島中ニ棲息シ其肉美ナラス

四磯嶋白黒ニ種小鳥ニシテ常ニ嶋内ニ棲イ其數甚クサシ

五鯉鳥群ルヲ以テ此名アリ其味燕ニ亞ク

六オサ鳥大サ鷹ノ如シ之ニ腹ガケオサ山オサ白オサノ三種アリ肉ハ食スヘキモ賞ス

七白鳥白色小鳥ニシテ其形愛スハク剥製トシテ輸出ス

八尾長鳥一名ホリスン常ニ嶋内ニ棲息シ赤色ノ長尾一或ハニラ有シ長サ七八寸全身白色其大サ鴨ヲ稍小ニシテ肉ハ食スヘキモ一種ノ臭氣アリ剥製ヲ以テ賞セラル

以上外黒鳥南洋鳥オデコ鳥其他小鳥數種アリ

昆虫内地モニキモリ黒色ニシテ白帯アリ蠅丸モ蚊病黄色小蠅十時頃

以上外黒鳥南洋鳥オデコ鳥其他小鳥數種アリ

昆虫内地モニキモリ黒色ニシテ白帯アリ蠅丸モ蚊病黄色小蠅十時頃

以上外黒鳥南洋鳥オデコ鳥其他小鳥數種アリ

昆虫内地モニキモリ黒色ニシテ白帯アリ蠅丸モ蚊病黄色小蠅十時頃

昆虫内地モニキモリ黒色ニシテ白帯アリ蠅丸モ蚊病黄色小蠅十時頃

人ヲ螫ス

感ノ為メニ談時間ハ授業ニ苦ム雨天ニ潜

四時頃迄日中暑熱甚シキハ未リテ

尺取虫、蜘蛛、赤蛾(小キ虫ニテ夜中燈火ニ集ルモ頗ル多シ)ワニヅラニモ多ク附著ス

害虫ニテ内地ニ於テ羽虫ノ如シ島民ハ皆本虫ノ刺傷ノ為メ両下腿及腹部等ニ創傷ヲ有ス等ナリ

(魚ハ) 鮫、ヒシヤウ(鮪ノ類)サワラ、カツホレ(鱈ニ似タリ)最大ノモノニ尺) 白トゲ、尾長、蛇

鰻(味尤モ美)、大口魚、鰈、青魚、赤魚(目玉赤ク尺五寸位)、フグ、シマ鯛等最モヨシ然レモ

漢業ヲオスモ飯国セシ以來日常ノ食料ニ釣スルニモテ專業トナスヲナシ

其數少クハ犬嶋氏在住ノ際之ヲ得ルヲアルモ近來之ヲ見んナシ

(樹木) 島内僅カニ三種アルニ

一 椰子樹、島、西南端約二町歩ノ樹林ヲナシ最モ繁茂セル所ハ二坪ニ三四

本ニ高サ約六十呎ニ達ス島民ハ該菓汁ヲ便秘ニ用ヒ能ク下痢ノ効ヲ奏スト去ヘリ

二 弓ドリ樹、島、中央部ニ生育シ幹ハ正直ナルモ脆弱ニテ薪木トナスノ外用途ナ

三 葎ノ木、葉ハ煙草ニ類シ幹ノ高サ約三十呎周圍三尺ニモテ全島ニ繁茂

シ葉ハ乾シテ煙草ニ代用ス一種ノ香氣アリテ吸喫ニ堪ヘト云フ

其他大根南氏胡藏 <small>ハコノハインアツブル</small> マシラ等ノ移殖モモ收獲良ナラス (島民)明治廿九年小林大尉小笠原嶋ノ勞働者三十名ヲ天祐丸ニテ渡航捕鳥ニ 役事セシメ後二名ヲ殘シテ帰航シ其後更ニ八丈嶋ヨリ二十名ヲ移住セシメタル ニ始マリ爾來便船都度異動アリシモ現時二十九名アリ本島開始後ノ人負左 ノ如シ	東京府	一	四	三	三	一	〇
	埼玉縣	一	〇	〇	〇	一	〇
	千葉縣	一	〇	〇	〇	二	一
	神奈川縣	二	〇	〇	〇	九	三
	岐阜縣	一	二	〇	〇	〇	〇
	静岡縣	一	一	〇	〇	二	〇
	新潟縣	四	五	〇	〇	〇	〇
大坂縣	一	一	〇	〇	〇	〇	
高知縣	〇	〇	一	〇	〇	〇	
山梨縣	〇	〇	〇	〇	二	〇	
	男	女	男	女	男	女	

長野縣
福島縣
栃木縣
愛知縣
福岡縣

合	二五	一八	五	二五	一	一	一	二	四
---	----	----	---	----	---	---	---	---	---

統計 七十七名 内 男五十五名 女二十二名

右外サイバシ人四名在任セシモ昨年八月帰國セリ

〔村落〕水谷村ハ今面石井村ト改メシ本島ノ南岸ニ沿テ建築セリ合數キヤリ前
 記廿九年ノ渡航後ニ経営セラレタリモニテ僅カニ若干ノ屋舎ヲ連合セシ一團ニ過キズ
 故ニ稱モテ村トスハヤ、不穩當ナルニ似多本島ノ南岸ニ沿テ建築セラレ合數
 二十アリソノ構造ハ皆長屋造ニシテ棟柱ハ島産樹木ヲ用ヒ椰子葉ヲ以テ屋ヲ葺
 キ結構極メテ粗ナリ路傍ニハ島内(割製)肉ハ放置シテ肥料トナス)堆積飛々ニ小
 丘ヲナシ日光直射ノ際ニ悪臭ヲ放散シテ通行ニ堪ハス 制
 〔衛生〕本島ハ小笠原島廳ノ所轄ニ属スト虽モ目下何等ノ製穀ナラズ只水谷長

托也

嘯^{托也}島守アリテ僅カニ秩序ヲ保ツノ^顧故ニ衛生上ノ施設措置ノ如キハ皆無ト謂テ
 可ナリ汚初ハ年ト共ニ堆積スルモ敢テ^顧ルナク疾病ニ罹レハ之ヲ自然ニ放任スル外
 ナシ一朝重症患者ノ發生スルハ所謂見殺シノ止ムナキ悲境ニアリ是ニ於テ彼レ
 等ハ個人的ニ注意ヲ懈ラズ即チ石炭酸、硫酸、麻痺、臭護、苦味、丁幾、重炭酸
 那篤留謨、安知ヘブ^ン、硫酸、規尼涅、沈度、仿謨、軟膏、及び賞藥ノ氣轉丸(下劑)
 胃活、千金丹、室丹ノ類ヲ貯ヘ又攝食ハ必ス時ヲ規シ飲料水ハ必ス煮沸後之
 ヲ用ヒ日没後ハ海水浴ヲナシ便通秘結スルハ直チニ下劑ヲ服用スル等ノ風ヲ養
 成セリ

脚氣ハ本島(寧日本島倭人)ノ風土之病ナリ移住以來本症ノ為メニ死亡セルモノ五名帰國
 セルヲ二名現時或名ノ患者アリ(此等ハ皆本艦ニ便乘歸國セリ)二十五年乃至四十
 年ノモリニテ剥製ヲ業トス者皆之ニ襲ハル彼等ハ終日板上ニ坐業シ全身運動
 ラナス機ナレ而シテ食物ノ配合宜キヲ得サルハ固ヨリ其ノ主因ナラシ然レモ彼ノ
 單ニ食水炭素質ニ比シテ蛋白質^{供給}不足^{供給}此^{供給}本病ヲ發スルト云フノ理論ニヨレハ本
 島民脚氣多發ノ原因ヲ説明モ難キヲ覺フ何トシハ彼等ハ魚鳥ヲ以テ主食
 トナシ穀物菜蔬ハ常ニ不足ヲ感スル程ナレハ寧ロ食水炭素質ニ乏シキモ決シテ

富澤分社印刷

クハケル

蛋白質ニ欽スルカ如キコト之ナケレハナリ生理學上人類トシテ食品ノ不調和

勿論ナルカ病理學上ヨリスレハ反テ壞血病ヲ起スモ脚氣ヲ發スルナカルヘシ然レ

ニ壞血病患者ハ一人モ之ヲ出タサス(ツトヒ全員少數ナリハイ) 結ト謂 向來獲キ乾

島人時々輕度ノ腸加谷兒ヲ發スルナレモ他ノ疾患ナシ笠置滞在中服藥ヲ需

メシモ八名ニシテ内外被病三外傷一他ハ消化器病ナリ笠置ヲ駐在員ハ咸ナ健

康ニシテ三十有一日間ノ滞島中一名モ患者ナカリシト云フ

主人ハワニダラズノ刺傷ニ害ヲ蒙ラサルモナシ該刺傷ハ初メ瘡痒疼痛尋ナク

水泡ヲ形成スルニ到リ始メテ刺サレタルヲ知ルコト多シ刺傷部ハ先ツ發赤ス此際芳

香安母尼亜精ヲ塗布スレハ水泡ヲ形成スルナシ水泡自然或ハ人工ニ破壊シテ透

明ノ漿液ヲ漏ラス之ニ製膏帶ヲ施セハ一兩日ニノ結痂スルモ放置スレハ化膿ニ

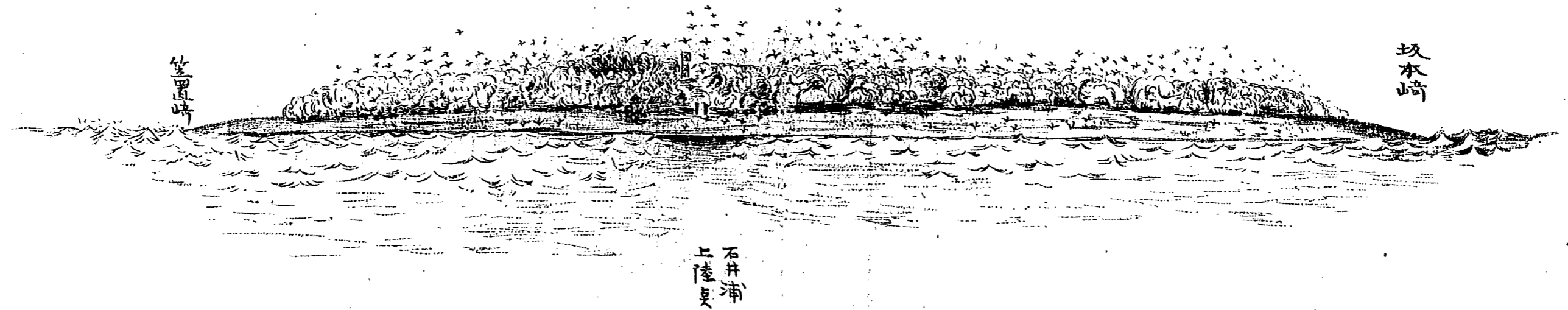
陥リ治癒ノ後深キ瘡痕ヲ止ムト云フ

溫度ハ台灣北部ト全緯度ニアルモ彼ト如ク温差ニ急變ナシ酷暑ハ概子内

地ノ盛夏ニ比スヘシ朝夕ハ大ニ冷ニ北風雨ニハ子ル禱祥事業服ヲ寒冷

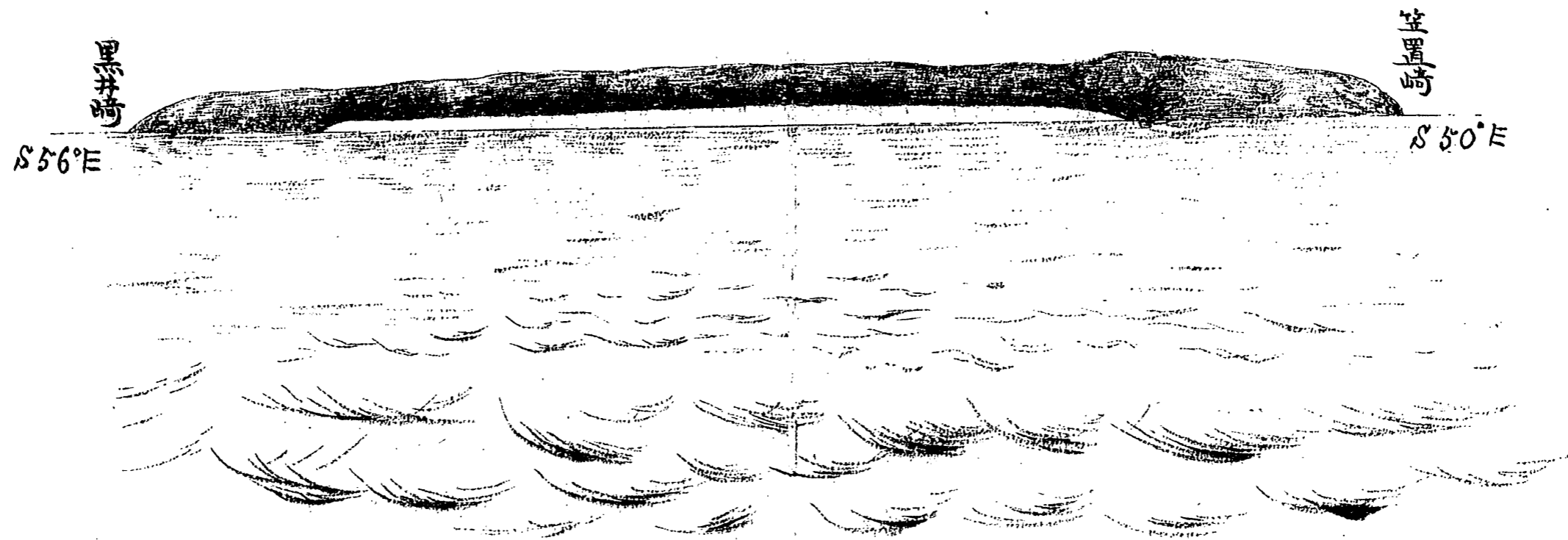
ヲ覺ユト笠置上陸員滞島中正午ニ於ケル室温ハ最高九十九度最低八

十一度平均九十度ナリ

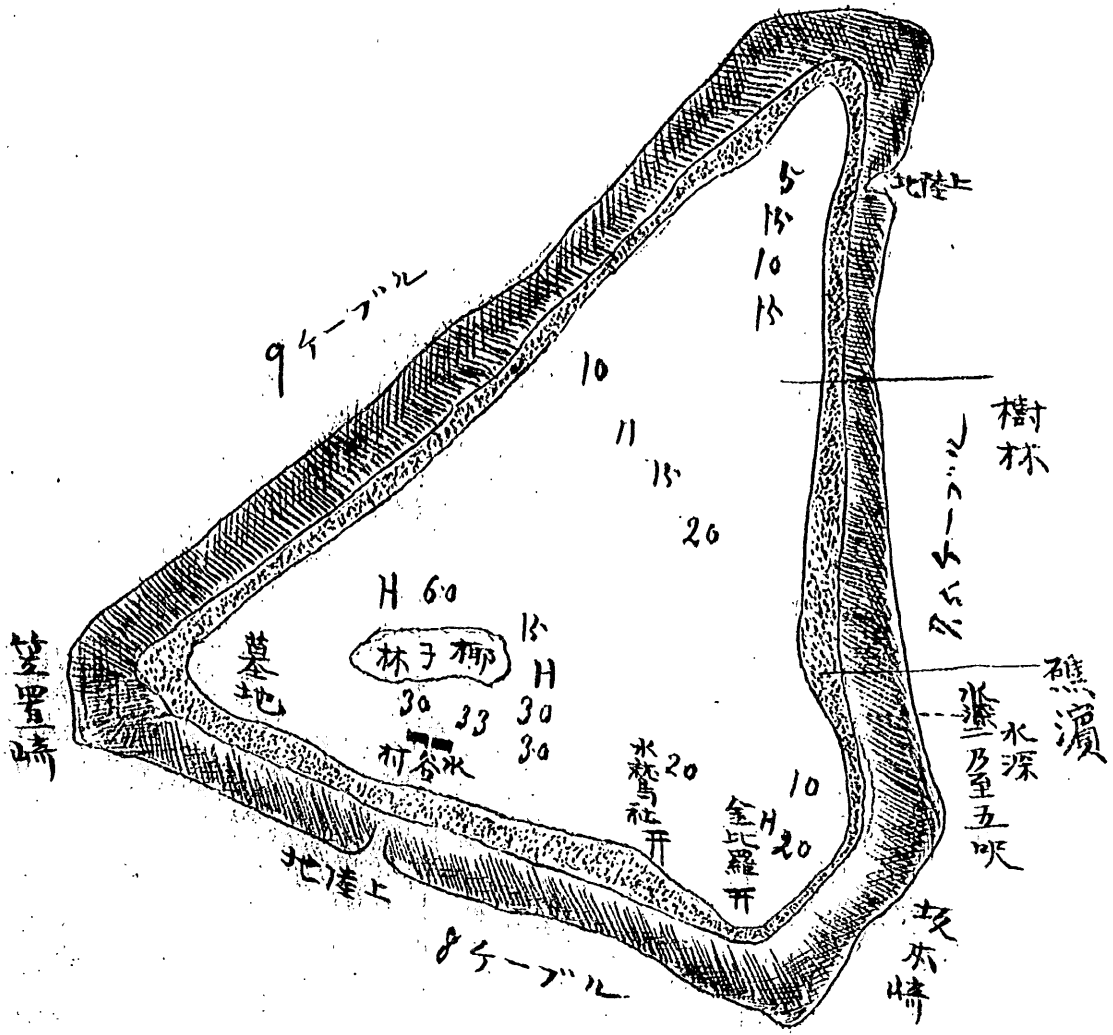


南島見取番

遠距離



黒井崎
サ高ノ木ハ



南島鳴表面圖

〔教育〕従前ハ事務員ニ本野某アリテ兒童ニ小学科程ノ教授ヲナセシモ三十三年全島歸國セシ以來全ク廢セラレ當時書籍類タニナク今ハ十三歳ノ小女（アルノミ）

（學童トシテ）

〔生業〕従前ハ羽毛及鳥糞採取ヲ主トシ傍ラ漁業ヲ營ミ鳥肉ノ罐詰ヲ製シテ輸出セシモ八丈嶋民販帆セシ以來漁業衰頽罐詰業亦振ハサルニ至リ現時横濱上滝七五郎氏剥製ヲ專業トシ鳥肉ヲ以テ肥料ヲ製シ横濱ニ輸送ス剥製ハ燕白鳥ホースレヲ最良トシ其他島中ノ諸島ヲ時期ニヨリ捕獲ス剥製ハ一日一人ニ七十羽ヲ製シ職ユ十人アリテ一日約八百ヲ製ス其賃金一日二拜ニシテ一人一日志円五六十大ヲ得然レモ近來任民稍々多キ過キ諸島漸次去リテ其數ヲ減シ爾後三三年ハ著シク減少スヘキヲ以テ一時捕鳥ヲ中止シ之レカ増殖ノ方法ヲ講シ後更ニ着手セザレバ本島ノ生産力ヲ減殺シ本島ノ不利ヲ来ス可キヲ看破シ近々島民ハ「ハルニヤル島」(本島ノ南方約四五百哩)へ轉移スヘシ然ラズ水谷氏ノ島守ル片倉作次郎夫婦殘留スルニナリ

本島ハ諸作物生育セラルテ土地農業ニ適セス故ニ穀物ハ之ヲ内地ニ仰キ生野菜ノ如キハ之ヲ採取スルヲ容易ナラス年二回ノ便船延着ノ為メ穀物欠乏スルハ極

滿洲分社印刷

五 小笠原群嶋

小笠原嶋ハ太平洋中ニ孤立スル一小群島ニシテ文祿二年小笠原貞頼ノ發見ニ係ル爾來其
 姓ヲ取テ嶋名トシ永ク我版圖ニ歸セリ爾後渡航中絶シタルノ故以テ徃々外人ノ占據ス
 ルニ任シ彼ノ嘉永六年彼理來航ノ時ノ如キ實ニ本嶋ノ要地ヲ占メテ軍艦ノ碇泊所トナシ
 住民ニ勸告シテ「ビール」嶋殖民地ト稱シ憲法ヲ制定シ自治ヲ圖ラシム既ニシテ幕府モ外交
 政策ノ忽ニスヘカラス版圖ノ確定セラルヘカララル覺リ夫久二年水野筑後守服部歸一等ニ
 命シ此嶋ヲ巡檢シ各種ノ外民移住者ヲ懐柔シ又新ニ八丈嶋ヲ移住セシメ法ヲ布キ思ラ
 施シ各ノ地名ヲ撰定ス是ニ於テ全嶋始メテ我管理ニ歸シ其命ヲ奉スルニ至ル丈久
 三年幕府内憂外患交々至ルニ及ヒ本嶋ノ守リ難キヲ虞リ命ヲ傳ヘ盡ク吏民ヲ引揚ケ
 シム此時一旦邦人ノ迹ヲ絶テカ後十五年即チ明治八年大隈重信首トシテ開拓ノコトヲ獻議
 セシニ由リ全嶋再ヒ我ノ管理ニ復シ今年より一年四回ノ定期郵便帆船ヲ内地ヨリ廻航セシム
 ルニ至レリ今十五年本嶋ニ住スル外民盡ク我カ民籍ニ歸化編入ス降テ今三十年八月帆船
 航ヲ汽船ニ改メ更ニ航路ヲ三宅・八丈嶋ニ取ラシム是ニ於テ移住ヲ謀ルモノ益々多キヲ加ヘ
 今年十二月三十一日ノ調査ニ實ニ全島ノ人數二百五十六人口一千零七十六ヲ算スルニ至レリ

歴史 本嶋ハ後陽成天皇ノ御宇文祿二年小笠原民部少輔貞頼ノ發見スル所ヲ後天明

五年仙臺人林子平三國通覽ヲ著ハシ海防ヲ説キ亦本嶋ノ事ヲ記開拓ノ利ヲ唱フ是
 レ當時草莽ニ在テ此島ニ着眼セル者ノ初ノナリシナリ而カモ子平ハ爲ノニ罪ヲ獲テ禁
 錮セラル今時ニ平賀源内亦此島ニ就テ議スル所アリ下テ天保十年渡邊登高、高野長
 英等此嶋ヲ議シ言海外ニ及ヒシカ爲ノニ訶セラル其十三年東條信耕伊豆七島圖ヲ
 著ハシ併セテ本嶋海防ノ事ヲ説キ訶セラル

兼應年中紀伊ノ密柑商遠江灘ヨリ此島ニ漂流シ後恙ナク歸ルヲ得タリト云フ

寛文九年十一月阿波淡川浦船頭勘右門等七人漂着シ今年末勘右門病死
 シ餘ハ翌年皆還レリ

享保四年秋遠江荒井ノ船頭左太夫等十二人漂着シ左太夫等盡ク死シ生還ス
 者僅カニ三人ノミナリ

元文元年江戸湊所船頭善助等七人漂着ス

天明五年三月土佐赤船頭源右門等漂着殆ト死シ生還セル者一人ノミナリ

天明八年十二月大坂北堀江ノ船頭儀三郎等十二人漂着シ二人死シ餘ハ皆生
 還セリ

寛政元年六月薩摩志布子浦船山保右門等八人漂着ス

以上漂流島五六年或ハ二年久シキニ亘ルモアリ歸ルハ必ス官ニ申ス而ノ前後ノ

漂流言フ所大同小異ニシテ或ハ南島トノ唱フルモアリ又噴火山トノ云フモアリ

天保十年十月陸奥ノ氣仙郡小友浦ノ船頭三ツ亟等五人鹿島灘ヨリ漂流シ翌

年正月四日ニ見港ニ着シ島人ノ恩遇ヲ得三月廿四日下総鉾子港ニ歸着セリ

嘉永九年日本船元嶋ニ漂寄シ過セル佛国船其水夫五人ヲニ見港ニ送り厚ク

遇シテ内地ニ還ラシム

外人ノ來嶋 一千八百三十二年(文政六年)米國捕鯨船長 コッフィン 母嶋ニ來リ自ラ始

メテ發見スル所トナシ此島及ヒ碇泊ノ港ニ已レノ名ヲ附シタリ

一千八百三十四年(文政七年)英捕鯨船「サップライ」号ニ見港ニ到リ一樹ニ一板ヲ釘シ來

泊ノ事由ヲ記シ去ル

一千八百三十七年(文政十年)英政府ノ測量船「プロット」号艦長 ビーケー 近海ニ來リテ自

ラ發見スル所トナシ父嶋辰巳浦ニ見港、元嶋瀧浦、弟嶋等へ今日用ユル洋名ヲ附シ

テ英領ト稱シ文政十二年魯國海軍ノリュッケナルモ赤魚日領ト命シ一樹ニ一板ヲ附

シテ去ル

沿革 小笠原氏發見後屢々往來セシモ人民ヲ移殖セス航路中絶無人ノ境ニ歸セ

シムス來人ノ移住セシハ實ニ天保元年(一千八百三十年)ニモ是此地沿革ノ初ノナリ此歲夏

伊太利人 マテオマダニナルヲ頭人トシ米人ニ英人一噠人一等五人布哇島ヲ來リ

其島人男女十七人父嶋扇浦ニ來リ移ル即ケ現在住民ノ初ノナリ後英人(一千八百

十五年天保六年)男女六人母嶋(沖村)ニ移ル是レ母嶋住民ノ始ノナリ

彼理ハ牛、羊、野羊、鹿及ヒ七面鳥等、禽獸若干ヲ此島ニ放置ス現在談嶋ニ繁

殖スルヲ是レ其初ノナリ彼理歸國ノ後此嶋開殖ノ事ヲ唱フレモ果サス是レヨリ先

キ弘化三年幕府此島ヲ開ク論起リシモ遷延決セス後外人未確スト聞キ終ニ

文久九年九月外國奉行水野筑後守忠徳ニ命ジ此嶋ヲ開カシム

各種歸化人 天保元年(一千八百三十年)歐米ノ白人五人布哇ヨリ其島人男女十七人

ヲ伴ヒ父嶋ノ洲崎ニ移住シ後各地ニ分住ス其後歐米人及南洋島人等鯨漁

船ニ乘リ來リ或ハ止マリ或ハ去ルモアリ多クハ在島ノ布哇婦ヲ娶リテ子ヲ生ム又母

嶋ニ移住スルヲアリテ人口漸ク繁殖ス之レヲ調査セシニ天保九年初渡ノ時三千人許

ニシテ今十年ニ至ルマテ其多ク殖スルヲ見ス嘉永六年(一千八百五十二年)夏父嶋ニ三十一

人アリテ皆大村、奥村、州崎、北、依澤ニ住ス内英米人各四、葡萄牙人一、南洋人一、其

他布哇島人ト本嶋ニ生ル、賣女ナリ

文久二年(一千八百七十三年)ニ至リ父嶋大村奥村境浦州崎等ニ合計十戸四十一人アリ
内英人一、米佛葡各一他ハ其子女及ヒ布哇人南洋人ナリ母嶋沖村ニ英獨各一其
子女及布人一戸十四人アリ

明治六年(一千八百七十三年)ノ春ニ至リ父嶋ニ六十八人大半小兒ニシテ内米英佛人アリ其
他母嶋ニ米一、南洋一、聲嶋ニ米人布哇人各一アリシカ翌年退去シテ父嶋ニ移レリ

明治八年(一千八百七十五年)ノ冬ニ父嶋ノ大村奥村境浦州崎北袋澤
南袋澤、南崎等ニ合計十四戸七十一人アリ(男三十七女三十四)内ニ英佛葡各一、三十
余人ハ本島ニ生ル小兒ナリ就中内地ノ婦人アリ之ハ明治六年ヒースカ横濱ヨリ

携来シ去人ノ中ニテ四人ハ婦リ元ハ島人ヲ夫トス當時母嶋沖村ニ獨南洋人
各一及ヒ婦ト小兒ト一戸三人アリ

明治十年(一千八百七十七年)父母両島ニテ男女老幼ノ計五十一人アリ (英男十一)(佛男三)

(葡女十)(加那加女三)其戸数十三ニシテ各一所ニ住ス

明治十二年(一千八百七十九年)父母両島ニ住スル者(英男十三)(米女四)(佛男三)

(葡男四)(西男五)(加男二)計五十六人十五戸ナリ

明治十五年(一千八百八十二年)四月佛一、英六、米四、西六等皆帰化シテ我民籍ニ

横濱分館印刷

入ル

明治三十年現在歸化人ノ住所

大村四戸十二人

釣濱一戸十人

奥村六戸十人

屏風谷一戸四人

南袋澤三戸十二人

二戸村一戸三人

州崎一戸六人

(以上父嶋)

沖村 六人

南崎一戸五人

(以上母嶋)

合計 二千戸七十七人 (内男三千七、女三千五)

明治三十年以後ニ係ルモノハ別紙統計表ニ審ナリ茲ニ贅セズ

小笠原島 (寶箱)

風土 本島ハ其地形丘陵山岳ヨリ成リ曠夷ノ地ニ乏シト虽モ地味肥沃草木繁茂シ四

時鬱蒼トシテ禽鳥聲韻ヲ放テ大氣乾燥シテ最モ清淑ナリ日常ハ氣候中和シテ

昼夜ノ温差四五度 極寒ニシテ華氏五十度ヲ降ラス 酷暑ヲカ九十三度ヲ日射ラス

故ニ冬季霜雪ヲ見ス從テ暖爐ノ要アルナク夏季更ニ凌キ難キ煩熱ヲ覺ハス

只秋季西三回大風起リ屋ヲ幾キ樹ヲ抜クヲカリ年中二月ノ交最モ寒ク八月

最モ暑シ

食料 土人ノ主食ハ米麦(内地ニ之ヲ仰ク)ニシテ肉野菜類ヲ以テ副食トナス然ル

二三年前マテ肉類ハ副食ノ大部(約九分)ヲ占メタリシモ爾來野菜ノ栽培法發達シ
現時ハ肉六野菜四割合(大村中流食)ヲ以テ副食トナスニ至レリ

食肉中鰻鱺龜ハ副食ノ大部ニアリシモ昨年来罐詰トナシ内地ニ輸出路開ケレ
ヨリ其食用頓ニ減シ他ノ魚肉ヲ以テ之レニ代フルニ至レリ野菜中主ナル者ハ里芋及ビ

薩摩芋ニ種トス

飲料水 泉水ハ之レナシト雖モ井水ヲ以テ飲料ニ充テ水量充分ナリ現昨年

四月ノ降雨ナカリシ時尙ホ缺乏ヲ告ケス又風呂浴ヲ濫スルカ如キモノナカリシト云フ

二見港上陸場近傍ニ於ケル井水ヲ検査セシニ次ノ成績ヲ得タリ

臭味ナシ 無色透明 塩素少量 石灰稍多量 硬度尼亞ナシ

硫黄少量 亜硝酸ナシ 硝酸ナシ 有機物ナシ

人情風俗 内地ニ於ケルト大差ナシ只八丈嶋ヨリ移住民多數ヲ占ムルヲ以テ尙ホ

談島ノ風ヲ遺スモノナキニアラス

生計 一般ニ良好ニシテ富者オキト同時ニ細民ト称スヘキモノハ殆ントナシ畢

竟スルニ四季氣候温暖ナルヲ以テ防弊(寒)患ナク衣住共ニ単純ニシテ足り加フルニ

食物ノ供給容易ナルカ爲メナラン故ニ勞働者(下級)ハ家族ニ三十円ヲ以テ充

編者分館印刷

之ヶ月ヲ支へ上級者等ト虽モ今家族ニノ十五乃至二十内ヲ以テ足レリト云フ
 教育 高等小學校ハ三十三年ノ設立ニシテ三校アリ其位置ハ大村、扇村及ヒ
 母嶋沖村ナリ次テ尋常小學校五校ニシテ大村、弟嶋、扇村、沖村、北村ニヨリ
 教育ハ凡テ文部省令ニヨリ内地ト敢テ異ナラナシ小學校ヲ卒ルノ後資力ア
 ルモハ東京ニ遊學シ歸他人ノ子弟ハ其後神戸ニ於ケル宗教學校ニ入ル
 又大村ニ英語會ナルモヲ組織シ子弟ノ研學ニ便ナラシム
 鳥、虫 本島ニ於テハ小鳥捕獲ノ禁制アリ蓋シ虫害ヲ防カン為メナリ鳥類
 中鴨、瑠璃鳥、鶯、鶯ヲ以テ主ナルモトシ鴉ト稱スル鳥、智嶋ニ棲息シ小豕
 ヲ害スルヲ以テ銃殺セルメ現今ハ著シク減少セリト云フ信天翁ハ十五六年前マテ
 ハ弟嶋ニ来レリト虽モ近來ハ之ヲ見ス只時々産卵期ニ姪島ニ来ルナリ
 人ニ害ヲ害スル虫類殆ントナレ只ラング虫ト稱セラルモノハ其形状螢ニ類似シ皮
 膚ニ觸ルヤ直チニ尾ヨリ透明液ヲ漏ラシ該液ノ刺戟ニヨリ皮膚ニ水泡ヲ形
 成スル恰モ芫菁ヲ塗布セルカ如ク又今時ニ劇痛ヲ致ス、蚊ハ非常ニ多クシテ
 ニ種アリ其一ハ内地ニ於ケル普通ノモノト全ナレモ他ノ一種ハ光線ノ作用強キニ從ヒ
 愈活潑ナリ夜間ニアリテ燈火アレハ飛ヒ来リ皮膚ヲ螫シ燈光ノ消失ニ由テ其

影ヲ隱慮ス其皮膚ヲ刺スヤ極メテ迅速ニテ觸ルヤ直ニ發赤腫脹ニテ腕

巨大ニ達ス但シ之ヲ放置スルモ四五日ニテ消散ス

蠅ニモ二種アリ普通ノモ及ヒ銀蠅ト稱スルモ之レナリ銀蠅ハ夜間出現セスト

蛭ハ早晨海辺ニ無數群ラナシ七八尺ノ高サニ飛翔ス其羽音恰モ遠寺

ノ鐘音ニ比スヘシ

蟻ハ非常ニ多ク栽培ニ有害ナルハ其類亦多シ蚕ハ極メテ少ク風ハ殆レト見ス

ト云フ

輸出品ノ主ナルモノハ白下糠、再製糖、檸檬、香蕉、木耳、木材、野菜、牛

牛皮、綠蟻龜、和甲、林投樹、鯉節、干貝、鳳梨、鳳梨罐詰、甘蔗、大

蘭、茄菲、雜貨、燒酎、製茶類、葉烟草、菜實、貝類等ナリ

輸入品ノ主ナルモノハ米、麥等ナリ

職業 農業六百五十四戸、漁業百十二戸、工業九、戸、商業百〇三戸

蔗糖業五十一戸、

醫事衛生 初メ醫務所ヲ設ケ何人ヲ問ハス施療シ父島大村ニ之ヲ置キ

シカ明治十九年更ニ母島沖村ニ之ヲ増設シ全廿年父島扇浦ニ大村醫局

務所出張所ヲ設ケ今年九月ニ至リ藥價ヲ徴收シ貧困ナルモノニ施療券ヲ
 與ヘ投藥施療スルコトニ改定セリ種痘ハ毎年各醫務所ニ於テ之ヲ施シ島
 廳ハ人民ヲ集メ衛生ノ大旨ヲ諭シ全島清潔法ヲ施行セシ以來以前ノ改訂習
 跡ヲ絶テ衛生ノ業大ニ揚カレリ現時雇醫三人(父嶋三人母嶋二人)産婆一人アリ
 テ醫事ニ従事セリ數月前父嶋大村ニ一醫來リテ開業セリ雇醫六月酬
 三五月乃至三十五円ニシテ藥品治療品ノ供給ハ咸ナ自ラ之ヲ營マシメ之ニヨリ得
 ル收入ハ醫自家ノ所得トセシム報酬以外ノ月收平均三十円アリト云フ其學術治療ノ
 程度ハ却穉ニシテ殊ニ衛生上ノ觀念ハ最も缺如セルヲ見ル
 父嶋ニ公娼若干アリ定期檢査ヲ施ス而カモ一般ニ梅毒性疾患少カラト云フ野菜
 ノ生産少カリシ頃ハ消化器病多カリシカ今ヤ漸ク減サシ又一時盛ニ脚氣患者ヲ生
 リシカ一般衛生ノ進歩ト共ニソノ數ヲ減シトリト云フ皮膚病ハ間々頑固ナルヲ見ルト云フ

附録

小笠原群島中其大部分ハ古來^世人ノ知ル所多シト雖モ硫黃嶋ニ到テハ尙ホ幼
 穉タルヲ免ス然レニ偶々島廳吏員篠本惣氏ノ詳細ナル報告ヲ得タルニ由
 リ茲ニ之ヲ附記スルコトナリ

小笠原島南方北緯約廿四度より廿五度半の間ニ有名な火山列島アリ硫黄嶋即
是レニシテ北、中、南ノ三島ヨリ成ル

中央硫黄嶋 (参照)

中央硫黄嶋ハ小笠原島南々西ノ沖北緯廿四度零分より同廿五度三十分東経百四
十一度零分より同百四十一度三十分の間ニ散在セル三個ノ嶋嶼ノ一ニシテ其中央ニ位
スルモタルハ明ナルモ未ク實測ヲ為セシニ非レハ其正確ハ保シ難キ實地視察ノ
書類ニ徴スルニ該嶋ハ南々西ヨリ北々東ニ流レ延長大凡八十町ニシテ幅員ノ最
廣ナルハ北東ノ極端ナル其中大凡四十町最狭ナル南端ニシテ摺鉢山以東ニ北ニ
當ル麓ニシテ六七町ニ過キス周圍凡ク六里ナリ摺鉢山ハ高サ大凡八十間其頂
噴火口アリテ其名称ノ如ク摺鉢ノ形状ヲナセリ該山岳ヲ除ク外東北ノ土地
饒力ニ高ク其他四西ニ様ナラスト虽モ概シテ平坦ナリ此平坦部ノ北々西ニ面
スル砂海岸ヲ北ノ濱ト称シ南々西ニ面スルモヲ南ノ濱ト称シ而シテ硫黄採掘ノ個
所ヲ本山及ヒ舊山ト称シ其他中ノ平、南平、北ノ平、南詰、北詰等
同嶋ノ自然地形ヨリ
土質ハ多ク焦土ニシテ各所ニ多量ノ硫黄噴出セルヲ見ル然レモ錦花甘藷芋瓜

横濱分館印刷

類尋、地味通シ終歲繁茂成熟ス

氣候ハ其熱度ノ最高華氏寒暖計九十七八度、最低五十二度、平均七十四度ナリ、驟雨屢ニ至ルモ大雨ハ稀ニシテ、風位ハ變遷頗ル速ナリト、亞東南風、強風ハ多ク西北ヨリ至ルト云フ

動物類ハ最モ寡ナク、信天翁、ソジロ鳥、ハリ鳥、濱子鳥、鷹、ササ鳥、鰹鳥、鴨、鳩、鵲、等外、獸類余多棲息セス、其湖海ニハ、魚類及ヒ海藻等絶テナシ、植物ハ、東隅ノ地ニ、タマナ樹生育シ、大ナルハ、廻リ四五尺ニ至リ、枝葉繁茂ス、トモ甚ク高カラス、其他黃槿、雜木等皆矮少ニシテ、用材トナルヘキモ、殆ヒト稀ナリ、林投樹ハ夥多アルモ、高サ僅ニ五六尺ニ過キス

本島ハ一ノ溪流ナク、又溜水アルナシ、飲料ニ要スル泉及ヒ井ヲ得ル途ナク、住民ハ雨水ヲ採リ之ヲ飲料ニ充ツ、三二年ハ、四十人程居リシモ、今ハ、二十人程住居ス

一天日製水塩、天日製塩ハ、先年田中鶴吉小笠原ニ於テ製セシヨリ、詰日明ニ至ルマテ日數五日間ヲ減シ、塩分モマタ隨テ多量ナリト

一龍舌蘭(マニラ) 該島ニ通スルハ、龍舌蘭ヲ最トシ、暑中干魃ト雖モ枯死スルノ患ナク、繁殖最モ良好ナリト

一甘藷、南瓜、是等モ地ニ適シ終歲不絶植付及ヒ收穫シ得ルト

一用材及薪炭材、家屋健築材及箱其他ノ細工材料トシテ桃玉、菜、シ、玉

菜ノ二種成長速ナルノミナラス質最モ良好ナリト

一林投、島中至ル處ニ繁茂シ此葉ヲ以テ繩ヲ製シ敷物ヲ製シ且ツ屋根ヲ

葺クニ用ユ實ハ餓ヲ凌キ糖密ヲ採集スルニ足ル

一濱黄槿、島中ニヨク生長シ皮ヲ剥キ水ニ浸シ日光ニ曝シ此纖維ヲ以テ草履

草鞋ヲ製ス

一椰子、島産、モ(或ハ漂着セシモカ)アリテ實ヲ詰ヒ熟スルニ及ヒ自然ニ落實、前

芽繁植ス

右外黄木、棟、黒鉄木、マ、キ、チキ其他名称ノ知レサル灌木類種ニナリト

一鳥類、信天翁産卵ノ期節ニ到ル處群ヲナシ其數幾許ナラ知ラス十月

ヨリ翌年七月迄雛ヲ養ヒ人ノ至ルモ怯シス又遁逃スルヲ知ラス依テ根柢ヲ

以テ毆打或ハ辛捕ニナスモ容易ナリ此内及ヒ卵ハ食料ニ最モ好^ク鳥ハ五月

ヨリ渡来シテ十月迄解卵育雛、其數幾許ナラ知ラス腹毛白色ニシテ

其毛ヲ捕リ蒲團ニ用ユ鰹鳥ハ六月ヨリ渡来十一月産卵離育其數亦多シ

南洋分館印刷

北地鷹、黒羽鳥、鶺鴒、磯子鳥、鶺鴒、瑠璃鳥、鶺鴒、鳩、眼白、大婦、鵜等、夥多、棲息ス

一海産物、鮫、四ッ針、鮫、鯉、無し魚、沙魚、釜魚、鯉、魚、鮪、カツホ、飛魚、鳥、賊、鎖、管、魚、五甲魚、海膽、緑鱈、魚等アリ

一貝類、岩、貝、床、節、貝、嫁、笠、貝、小、安、貝、筍、貝、等アリ

一蟹類、磯、蟹、山、蟹、寄、居、蟹

一石、(嶋ニ産スル石) 砂、濱、ヲ、除、ク、外、海、岸、一、圓、比、皆、同、一、石、ニ、シ、テ、高、サ、六、七、丈、其、色、薄、赤、色、ニ、シ、テ、其、質、砂、シ、ラ、以、テ、成、リ、少、シ、ク、柔、ナル、モ、能、ク、火、ニ、耐、ハ、強、固、石、也、電、ト、シ、テ、最、モ、良、シ、又、之、ヲ、挽、キ、割、リ、天、日、製、塩、田、築、造、ノ、材、ト、ス、鳩、申、有、益、ノ、石、材、ナリ

一玉石、北、石、ニ、解、ナシ

一草類、谷、渡、大、黄、草、澤、管、山、管、鷹、瓜、草、豆、蔓、鋸、草、葛、藤、松、葉、蘭、藤、鬚、山、朝、顔、野、菊、其、他、雜、草、八、名、稱、未、詳、多、數、多、アリ

一蟲類、蠅、蟻、蝶

一礦物類、硫、黃、明、礬、石

一移植セシ植物、龍、舌、蘭、(葉、ヲ、織、維、ヲ、係、リ、船、舶、ノ、綱、ヲ、製、ス、ル、材、料、ト、ス、強、韌、ナリ)

ユト遙ニ麻苧ニ勝ル有功ノ植物ニシテ實ニ該島特産ノ一種ナリ甘藷、南瓜、西瓜、
白瓜、胡瓜以上皆當地ニ適シ終歲絶テ下ナク食料トシテ最モ良シ

一 咖啡、鳳梨、玉蜀黍、香蕉、甘蔗、椰子、檳榔、青芋、扁豆、ヤム、シーカ
ンバン、薑、蕃椒、ヲツカセ、煙草、以上時付或ハ植付ヲナセシモ日淺ク未
タ結果ノ如何ヲ見ス

一 橡、橡、~~橡~~ヲカ護謨、以上試驗ノ為メ植付置ク

以上ノ報告外他ニ硫黃、硫磺ニ就テ尤モ驚クキ事實アリ摺鉢山ノ下ハ三百尺ニ高
キ稍ニ平坦ナル地トナル此處ニ珊瑚礁ノ遺跡、一面ニ存スルコトミテ余（海峽）廳川

瀬文氏ノ好意ニ由リ此標品ヲ得檢セシニ現今生活ニ居ンテ中ノ構造未
タ少シモ變化シ居ラス只表面雨ト大氣ト為ノ灰色ニナリ居ルニ全ク新期ノ状

シテ三百尺以上ノ高キニアルハ厄ムハキニ似タレトモ今日ノ該島ノ状況ヲ檢スレハ尚實
ニ驚カラルヲ得サル事實アリ其ハ今日非常ノ勢ヲ以テ島ノ隆起ニ居ルコトミテ三

四年前ニ數町ノ海岸奉^ノ生セシト稱ス思フニ此島ニ存スル一種ノ火山^的

他動力ニ依ルヲシカ

的

該 分 組 印 刷

南硫黄島(巻照)

南硫黄島ハ北緯廿四度十四分東経百四十一度二十九分ニ位シ高サ三千三十九尺
 周圍凡ソ三里許ニシテ山嶺常ニ雲霧勢絶ヘス四面峻絶多ク焦土岩石尤ラ
 以テ攀躋スヘカラス尺西南面ニ雜木ノ矮小ナルヲ成育スルヲ見ルノ他ハ雜草
 纒カニ生スト虽モ樹木ハ殆レト絶無ト称シテ可ナルヘシ誤鳴ニハ船ヲ寄スルモ海岸
 アレ親シク踏查スルニ由ナシ曾テ石野平ニ亟衣採拾ノ砌五年許リ佳シ居リ
 之漂流人ヲ見出シ助ケテ帰国セシノタリ

北硫黄島(巻照)

北硫黄島ハ北緯廿五度廿五分三十分東経百四十四度十六分ニ位シ高サ二千五百
 三十四尺周圍凡ソ四里強地勢多ク南面ハ我々タル断崖絶壁ニテ噴火ノ
 遺跡ハ南方ニアリ(全ク草木ヲ生セス西南ニ至リテハ矮小樹木雜草ヲ見ルト
 虽モ地勢峻峭ニシテ攀躋スヘカラス其東北面ニ方リ較ク傾斜ニシテ箇所
 及ヒ若干砂濱アリ本島ハ皆テ無人島ナリシモ過ル三十年石野平ニ亟衣外
 一名其東北面ノ地一部負付テ得テ閑暇ニ着手アリ而シテ主人産生物ハ甘藷
 綿玉蜀黍甘蔗等ナリ現今勞働者ハ男女併テ二十七名アリ飲料水ハ硫黄

鳩ト異リ不便ヲ感スルコトナリ地質ハ火山岩ニシテ樹木繁茂、箇所ハ墳土ヲ
 被レリ故ニ當時ハ植物成育尤モ良好ナルヲ見ル又動物ハ中央硫黄鳩ト
 等シク其類尤モ寡ナリ俗稱アレキサンドル（水禽ニシテ羽毛淡桃色眼畔ニ
 異斑アリ嘴赤シテ大ナリ尾ハ黒色ニシテ中ヨリ二條ノ細長キ赤色ノ長サ約尺五
 寸ノモリ尾シ居シリ）鳩、目白鵲鳩等ノ外獸類ノ棲息スルヲナレ沿海ニ鰻鰻
 等ノ魚類及蝾螺多ク産ス此沿岸ノ蝾螺ハ内地ノモリニ比シ角ナリ介殼尤
 モ美ナリ植物ハ桃玉名ヤロード 黄檀等ニシテ溪間ニ生育セル者用材トスル
 ニ足ル林投ハ中央硫黄鳩ト全シク樹幹大ナラス氣象亦中央硫黄鳩ト大
 差ナレシ
 海中火山ハ北硫黄鳩ト西南方ノ海中ニアリ海水非常ノ勢ニテ猛然遙カノ高サ
 ニ登リ居リシカ廿二年ニ熄ミテ今ハ灰ヲ混シタル海水ノ狀常ノ勢方ニテ泡立キ
 動キ居ルナリ